

天目山栖雲寺 第7回蕎麦切り奉納

令和3年11月

江戸ソバリエ・神奈川の会 恩田 智博

令和3年11月13日(土)、江戸ソバリエ・神奈川の会は、特定非営利活動法人江戸ソバリエ協会の協力の元、蕎麦切り発祥の地と言い伝えのある天目山栖雲寺(山梨県甲州市大和町木賊122)において、第7回蕎麦切り奉納を実施しました。



蕎麦切り奉納は、平成27年からはじまり今年で7回目となります。今年の参加者は6名と少なかったものの、江戸ソバリエ協会からほしひかる様と松本様にご参加いただき、無事に奉納を執り行うことができました。また、栖雲寺の本堂前に建立されている「蕎麦切発祥の地」の石碑横に、ほしひかる様が「蕎麦切発祥の地」説について文章を寄稿された説明板の設置も同時に行いました。

栖雲寺が、蕎麦切り発祥の地といわれているのは、尾張藩士天野信景が残した雑識集『塩尻』の宝永年間(1704~1711年)の条の記述によります。「蕎麦切は甲州よりはじまる、初め天目山へ参詣多かりし時、所民参詣の諸人に食を売に米麦の少かりし故、そばをねりてはたこ(旅籠)とせし、其後うとむ(饅頭)を学びて今のそば切とはなりしと信濃人のかたりし」

栖雲寺の開山は業海本浄(ごっかいほんじょう)ですが、業海本浄は元朝第四~六代皇帝のころ、天目山(中国浙江省杭州)にいた臨済宗幻住派の中峰明本(ちゅうほうみょうほん)に師事し1326年に帰国。1348年に杭州天目山辺りの景色によく似ていた木賊山に天目山栖雲寺を開山しました。業海本浄が修行した禅宗では料理も修行の一つとされています。また杭州は南宋時代から麵屋や多くの飲食店が営まれていた都でした。大陸土産として蕎麦切りを栖雲寺に伝えた可能性は十分にあります。栖雲寺には業海本浄と中峰明本の木像があり毎年玄そばを奉納しています。

蕎麦切り奉納は午前10時に始まりました。参列者は白装束を身にまとい、奉納する蕎麦切りを三方にのせ、本堂前を練り歩き、本堂で住職による奉納のお経がはじまりました。途中で三方を住職にお渡しし、ご本尊前に蕎麦切りが奉納されました。今年は住職の他に各地から6名の和尚様が集まり大般若祈祷も行われました。本堂には多くの来山者も集まり諸願成就を一緒にお祈りしていただきました。



奉納の後、庫裏では江戸ソバリエ・神奈川の会代表の木下善衛氏がそば打ちを披露しました。打った蕎麦（新蕎麦）は神奈川の会のメンバーの畑で収穫された辛味大根おろしを添えて、住職と和尚様に召し上がっていただきました。打ち立ての蕎麦切りは毎年大変好評でおかわりを嘆願されるほどです。例年では、来山された一般の方々にも蕎麦切りを振舞っていましたが今年は新型コロナの影響で中止しました。

午後は本堂前に建立されている「蕎麦切発祥の地」の石碑の横に説明板の設置を行いました。説明板の文章は江戸ソバリエ協会のほしひかる様が寄稿されました。以前、文章は印刷されて木製の板に張られていたのですが、台風等の影響で壊れてしまったため、新たに丈夫なアルミフレームの看板を看板屋さんに発注して作りました。「蕎麦切発祥の地」の石碑の位置も数か月前に本堂前に移動されたので、説明板も目立つ位置にたてることが出来ました。栖雲寺を訪れた方々に蕎麦切り発祥の地の伝説を理解していただく助けになれば幸いです。毎年蕎麦切りを奉納している江戸ソバリエ・神奈川の会にとっても良い記念となりました。

令和4年の開催は11月12日（土）の予定です。栖雲寺では宝物風入れ展が開催されており武田家ゆかりの宝物等も見学できます。本堂裏の石庭が素晴らしく紅葉もとてもきれいな山寺です。来年は住職によるそば打ちも披露される予定ですので、江戸ソバリエの方々も是非是非お訪ねください。

（天目山栖雲寺ホームページ：<http://www.tenmokusen.or.jp/>）

参考文献：

「蕎麦切発祥の地」説について（ほしひかる寄稿）

以上